生涯を孝あるして浅後父の厚恩酬ひ立へ
とと思ひ侍さしとあるへ心あるを屈くもけうく書
数く孝子波柳かりて世居士を思ふ
只俳諧ハ拾ふる歌集も笑を朝夕ト切ふ
る形見とて外の月を思ふ葉ハ立ち
新蕎麦納豆汁ふる東友ふ
はたし高く哺ふ紙くふ白ぬ

形ばかり勝手にこもるに今はさ
らにつれづれなるものかなしく学問にも
更の中より拾ひ集めて棒にもちをそなへ
追善のこころばせ通夜の念仏まことに具足
同友の志にて住寺をもとりて弥陀
今夕貴人の厚情にて法華経をよみ
如是我聞八五

病中吟

是こそは黄金仏や仏うえ
毒消噴
出見るか下ろうも同形なる

安永六丁酉稔霜月十五日行年四十二卒

国へ出る足も弱し　菌狩
引川の石飛ばして茶時分
科なかん虫ハ鈴さし菊のぬし
志りうく迄朱も居眠る小春かな
庭守比起て驚く落葉かな
生雞ハ氷の盞やかし用意

右　桃源舎哥柳居士

既往昔をしのぶ松をたづねて夢の
面影をしのぶ今日の夏
うつりやすきあはれへ行くて
露の玉年をあらそふ波挿

汲捨る閼伽も埋まほし原氷志夕

今朝いかや素踏ふて墓参り花山

持誠を名ぬけ行りて水や露の玉 加茂曙白

水仙や中しまを名殘ふ 鎖目古珩

物淋しく風ゆきを見て枯柳 山梨舊鯉

かこさりあたりの夜よ袖の時雨り 岩下奥羅

岸の火ぬ水に消ぬ火鉢かな 河内祇完

朦朧て夜白もよはし 枯野 祐之

[illegible]

風雅又国歌人　白井河原山人

右谷文晁略

[illegible]月は[illegible]

病床の時に[illegible]　公命にて[illegible]

[illegible]

[illegible]

告来れるみ[illegible]

玉藻降や神しまの浦[illegible]　唐柏盛来

一首

何友歌事[illegible]

一心に[illegible]　七覓山瑚璉

面新に面へ[illegible]　甲府古童

[illegible]

哥柳[illegible]　和長

雑行をわすれ心を空に帰し
むすび峠こえける

同行五人 林一茶 焼石 平松屋 敲氷

桃源舎寿柳居士八十四歳迄の春より
しら雪の裏月中五の庵ぬ脱て
[illegible]
[illegible]法一周法會小一寺を[illegible]
[illegible]

物思ふ目八雪うつ梁を月 曙自

見る内に秋法もや[illegible]千賀女

光陰の矢も早和や一周忌 盛末

色々来月日はをしむ[illegible]構 波柳

[illegible]月日をくめくり来る物うつり[illegible]の
[illegible]友を[illegible]波柳[illegible]
[illegible]命をいとふ[illegible]

世[illegible]神を[illegible]お取誠 [illegible] 五

丙申菓月四日浮亀菴老師滝留中三吟

哥仙

行人乃為もこの為へとや桜花　八五

ふるさとをこふる月の山の端　蓑行

波よ村雨秋霧の露柳　孝柳

うるはしくはつかの月の詞哉　五

嶺の雨おもふ又は春霞る行乃松　行

小春も盃ぬ杉の東風　静

ウ

ゆのふれ形も新家へ寒し暗　七

むらさ呵りて寺代系　行

川止まるやう果ぬ皐月雨　柳

幕をれ波してて晴れ牧狩　五

須塚のやうに酔る鷲乃破　行

十会塔る側手唾を　柳

因幡も清き玉ぞ清らなる
ほとゝぎす風の拂底
簑笠の書も人質乃少き
ひとりも利く醫者の師匠
山も皆種子白きて出ぬ
芝ゝ芝ゝ移る河水
永いも長き休まぬ旅とも

徒合きん丈ゝ高い
彼ハ丈ゝ御傘ゝ貸て金釵て
家も旅ゝ巣ゝ中り神
源門の独ゝ巣ゝ絶ゝ浦
世代ゝ家作ゝ拵ゝ五
御車の牛ゝ用利ゝ教まる
降ゝ日ゝ降ゝ来乃雨

淵答も探さぬ葉の葉陰
かしハ屋を時雨る長崎　柳
かさ屋の灯ゆ遠目の恋　竹
奇特なる庭の冷水　雅
中二日目ハ俳諧の事　柳
ゆゑ志ハ煙草の煙　也
朝夕掃き捨て仏蓮の首　竹

孫も沢山喜をたくさん　也
多くて長紀尾を沢　柳
空も緑子　喜の雲山　竹

右艸稿

西中の秋ハ家の内囊を小ぶ
うの人ゝ家を忘れ
文を武をしゝ

世に未だ知られず然れども江戸
聞きたしと墳墓を雲霧の
内に求めて響鼎の伴侶
きてよろこらくべし路
あるべきを恨みて
今志ゝ墓よりゆせきりて

浮亀菴
巷阿

文春書庫